

經濟学会春季講演會

七月四日(木)午後一時 於寧靜館二十一番

講師 大和銀行頭取 寺尾威夫氏

演題 「最近の經濟諸問題の二・三について」

松山教授の司會のもとに、松井經濟學部長の講師紹介に続いて、寺尾氏は、演題に捉われることなく、現在問題になつてゐるものについて卒直に意見を述べたい、と前置して、大要次の通り講演された。

戦後大いに民主主義が主張されたが、民主主義は自由に考え、判断し、行動する反面、それに対する責任を取ること、即ち自由と責任との二本柱の上に組立てられるべきものである。フランス革命の標語たる自由、平等、博愛においても、自由は平等による制限を受け、それを包むものが博愛であつた。しかるに、戦後の社会では自己の主張は百分、他人の主張は百分否定する傾向が強い。かゝる混乱した社会において必要なものは健全な頭脳であつて、諸君の責任ある行動を望みたい。

ところで、現実の社会は極めて複雑であつて、通常、他の事情にして等しければ、という仮定のもとに構成されている理論

だけでは充分に説明出来ない。けれども理論なしに現実を説明することは不可能である。高い山にはそれ相應の広い基礎が必要であるが、この基礎に相當するのが理論である。又、現実の水は種々雑多なものを含んでいて、 H_2O だけではないが、水の成分は H_2O であることを知らずして説明のつくものではない。哲学と自然科学はその性格において異つており、茶室と鉄筋ビルのようなもので、そこには過去の業績を積み重ねてゆくものと、ゆけないものとの差がある。自然科学は過去の証明をもとにどんどん進んで行くが、哲学はその様に行かない。ところで、經濟學はその中間的性格をもつてゐる。ある恐慌論は、それが確立された當時には大體經濟の動きを予想することも出来るが、現実にはフアクターが多すぎ、しかも、時と共に變化して行くので、必ずしも予想通りに行かない。

さて、經濟問題についてであるが、最近米國で日本綿製品の輸入禁止の運動が起つてゐる。これは昨年日本の日本綿製品の米國への輸出の急増によるものである。と云つても全部で五、六千万ドルにすぎず、日本の米國からの棉花輸入は二億ドル以上であり、しかも、日本の米國への綿製品の輸出量は米國の綿製品に対する全需要に較べると、極めて僅かなものである。しかし考えねばならぬのはブラウスの米國への輸出が一昨年の一七万ダースから昨年の七〇〇万ダースへの急増であり、米國の全需要は九〇〇万ダースであることだ。一ドル・ブラウスと騒が

れるのも無理はない。日本もこの点考へねばならない。しかし、これは、米國や英國の高實銀の下で綿業が現在及び將來に適した工業であるかどうかの問題であつて、やがては日本の問題となるであらう。

金利問題について。利子率は國民經濟の資金需給状態によつて決るべきものであるが、現在はおかゝる資金市場に於て決る一般的な共通の市場利子率ではなく、統制利子率である。これは戦後、資金の相對的に少なかつた時期における變則的な利子率である。しかし、貯蓄も戦前の八五%まで回復したので、やがて統制利子率から市場利子率に移行して行くであらう。

今日の日本經濟の好況は世界的好況によるところ大である。このため、一時過剩だつた造船所も、最近では各國からの注文で不足になつて来た。私はこれを見て、世界經濟は大きい轉換期にやつて来たと思つた。と云うのは船主の多くはギリシヤ人であるが、この國民は国力の背景の弱い、従つて、純經濟的問題のみに関心をもつ國民である。この國民が大量の船の注文をしたからである。

日本は、東西兩文明の交流点に位し、兩文明が流れ込んで来る。我々はこれを民主主義の精神によつて判断し、統一して、固有の文明を創造して行かねばならぬ。これは我々に与えられた使命であり、喜びである、と、結ばれた。

この間約二時間、夏休み前とはいえ、詰めかけた數百名の学

生は、氏の講演が近身な、切實な諸問題であつただけに、広い視野に立つての氏の卒直な意見を終始熱心に傾聴した。氏は多忙な身にも拘らず、本經濟学会の懇請に応じられ、興味ある講演をして下さつたことに對し心から感謝の意を表した。

住谷悦治教授渡米

住谷教授はアメリカ經濟事情一般、ことに南部の黑人問題觀察のため、約三ヶ月の予定で、八月三十日京都を出発、渡米されました。